

第4期多摩区区民会議 第2回コミュニティ部会 摘録

□開催日時	平成25年1月28日(月) 午後6時00分～7時40分
□会場	多摩区役所10階第1002会議室
□参加者	辻野部会長、松本副部会長、大津委員、国保委員、戸高委員、西山委員、配島委員、本多委員(以上、コミュニティ部会員) 石橋委員(以上、自然災害部会員)
事務局	門間課長、井川係長、奈良職員
コンサルタント	斉藤研究員、梅田研究員
傍聴者	1名

1 前回議論の振り返りと本日作業の提案

辻野部会長から各区区民会議審議一覧、コミュニティ部会論点のまとめ、4期の開催スケジュールなどを確認し、配布された「検討用フローシート」に基づき、コミュニティの現状と課題について、これまでの議論からさらに掘り下げる議論をおこなうことが提案され、了承された。

2 コミュニティの現状と課題についての議論

松本副部会長 居場所づくりに取り組むのは難しいと感じている。500mにひとつずつ必要だという議論を解決するのはとてもむずかしいし、また、今期に区に居場所を1、2箇所つくるだけでは問題の解決にならない。地域に参画していない人が、もう少し地域を意識できるとか、地域に関われるようにするにはどうしたらいいか。定年退職者には有為の人たちがたくさんいるが、家でテレビをみているひとがほとんどだ。会社にいれば否応なく仕事をしなければならなかった。だから退職したら、もう、やらなくてもいいという感じらしい。若い人は仕事中心だから、地域への参加はむずかしいだろう。

西山委員 定年退職した男性はそれまで地域との接触がなかったため、近所の人を知らない。だから地域に出てくるのはおっくう。会社から開放されたから好きなように自由にしたい気持ちが強い。一方、子どもたちは塾・習い事などで時間がないから、出てこない。

大津委員 定年退職者が地域に出てきた数少ない成功事例として、平成13年に区保健所がやったリタイア熟年男性向けの「健康増進講座」がある。十数人が参加し、講座後も集まりを継続し、区の運動普及推進委員などをかけもちしながら、今でも月平均20日くらい活動している。最初は男性だけだったのが、奥さんも連れて参加するようになった。本人がずっと参加したい気持ちになって居心地がよければ、続く例だ。

配島委員 こども文化センターと老人いこいの家の合築の場合は、フラダンスとかビリヤードを教えに老人が「こ文」にいたり、子どもたちが下に降りたり交流している。こうした施設に来ることができる老人や子どもたち以外のひとたちが、教え、教えられる機会ができないだろうか。最初は小さな試みで、だんだん大きくなっていくといい

事務局 これまでの皆さんのお話で、新しく参加して続いた例とか、なかなか参加が進まなくて困った例が出てきた。成功した例では、続けられて良かった点、どうして続けられたのかの要因、また、参加が進まない例では、参加しないとどうして困るのか、その要因はなにかという話に進むと、フローシートに記入する内容も深まるのではないかと。

大津委員 長尾老人いこいの家を活用して小学校が土曜休みになった年に、多世代間交流を目的に「囲碁将棋並べよう会」を月2回始めた。これは今でも続いている。ただし、最初のうちは子どもたちが2、30人来ていたが、今は講師が7、8人いるのに、子どもが2

人しか来ない場合もある。子どもたちが自由に使える時間がなくなっている。子ども集めは大変になっている。

西山委員 多摩で生まれて多摩で育っているから、もっと多摩を愛してほしいし、多摩踊りがもっと普及してほしいが、とくに子どもが忙しすぎるし、両親も忙しすぎる。

松本副部長 いろいろなボランティア活動をやるときには、出てくる人は来る。しかし来ない人はいつまでも来ない。来ない人であっても、本当はどこかのコミュニティに属したいのではないか。出てこない人をどうやって出てこさせるようにするか。それがコミュニティ部会の目的ではないだろうか。

本多委員やる気のある人は多少の困難があっても、時間をつくって、どんなところだって出ていく。やる気のない人をどうやって引っ張り出すか。多摩ニュータウンには「福祉亭」という食堂兼コミュニティ活動もできるスペースがある。都の補助金をもらってやっている。食堂がある理由は、人は誰でも必ず食事をするから、食堂があれば人が来る。イベントには出て来ないが食事なら来るという話だった。食事は500円で、給仕などは付近の大学の学生が昼だけバイトに来ている仕組みだ。

辻野部長 多摩ニュータウンでは地域の絆づくりのためにコミュニティカフェを始めたことが新聞に出ていた。いろいろ試みているようだ。

戸高委員 環境に関わりがある活動を10年やってみて、環境に関心がある人がさまざま活動に関われる機会は、行政が用意してくれたものを含めてたくさんあることがわかった。勉強会での出会いで私たちの事務所を訪ねてきて、経理の仕事をやってくれている人もいる。自分のアンテナを働かせて、出てくる気持ちのある人は活動をしている。夫が会社を卒業し、たまたまの散歩先で多摩川せせらぎ館の活動を知り、多摩川の源流を見るイベントに夫婦で参加し、夫は今そのNPOの理事になり、知り合いを活動に誘っている。水辺の学校の佐々木校長も会社卒業後にたまたま自治会の仕事を割り振られ、地域の活動に参加するようになったと聞いた。佐々木校長はいいことをしようというつもりもなく、たまたま水辺の学校にいて、子どもたちに遊びを教えたら喜ばれた。それがきっかけだということだ。夫も佐々木校長もたまたま出会ったものを面白い、楽しいと感じて活動が続いている。外に出ない人でも、そういう出会いの場をどうしたらつくれるかを考えるとよいのではないか。シニア料理教室に参加した人とか、囲碁が好きな人とか。そういう人にこちらからほかの活動につなげるしかけをつくれないうと思う。

配島委員 ある大学で入学してきた学生がどうやって大学生活を送ったらいいか、どうやって友達をつくらうかわからないので、大学に来なくなる。そこで、大学が1年生を宿泊研修に連れて行くことにしたと聞いた。大学がそこまでしなければいけないようだ。

国保委員 心療内科が専門だが、ボーっとしてなにもしない男子の患者さんがたくさんいる。そうした患者は好きなことが何もなく、外にいけない。家は社会から遮断された城なので、ストレスが少ない。外はさまざまなプレッシャーがある。いったん、家でゆったりしてしまうと外が怖くなり、引きこもり、最終的に鬱になってしまう。退職して家に引きこもっている人は、話を聞いてみると決してそれで楽しいとは思っていない。でも外の厳しい社会からいったん家に入ると、これほど楽な世界はない。その人たちの抵抗感を打ち破って外に出る何かが必要。それが皆さんがいう、面白いこと、楽しいことではないか。好きなことで引っ張り出すしか方法はないだろう。ただ、70歳の人が60歳の人と話をしても、50歳の人が40歳の人と話しても合わない。70歳と40歳では、まったく話が合わない。時代の変化が激しいから集まっても話が合わないということもある。

石橋委員 障害を抱えている親の会の場合も、若い人とは話が合わないところがある。

松本副部長 地域で活動していると、お前は好きでやっているからいいと、もの好きのよう
にいわれて悔しい感じがする。

国保委員 そこは演技と話術でなんとか引っ張り込む技のようなものを、今期は考える必要が
ある。

石橋委員 どんど焼きとか地域の集まりのときには、みんな最初から最後まで黙っているの
ではなくて、挨拶や会話をしている。それがなぜいつもできないのか。自然災害部会では
自助の部分は自分でやる。しかし共助の部分は地域のことになってきて、自分だけで
できるわけではない。どんど焼きに出てきた人の姿を見れば、地域は捨てたものではない
と思う。これをどうやって共助につなげていけるかを考えた。親子でラジオ体操をする
のも、地域での絆をつくるいい方法ではないか。

松本委員 昔はラジオ体操は夏休みの間ずっとやっていたが、今は、最初の1週間だけになっ
てしまった。

石橋委員 お店も対面が減ってきた。対面で商売する店があるところはコミュニティが残って
いる指標になるかもしれない。

大津委員 自販機ができたこともコミュニケーションがなくなった理由かもしれない。たばこ屋
でそれまで5千円札を出すとちょっとしたおしゃべりをして、煙草とおつりをくれたが、
あるときから千円冊との両替だけして、自販機で買えとなったと聞いた。

辻野委員 そんな中でセブンイレブンが百円でコーヒーが買えて、お茶を飲めるスペースができ
ると聞いた。

石橋委員 富士宮市では社協が認知症の徘徊老人の見守りを地域ぐるみでやるようにしているし、
セブンイレブンと協力して毎日同じものを買いに来ておかしいと感じたら、家族や知人
に知らせる仕組みに取り組んでいる。

松本副部長 戸建住宅の住民は顔見知りになるが、町会に入ってくれてもマンションの住民
の方とはなかなか顔見知りになれない。

辻野委員 地域の高齢者の見守りをする民生委員のみなさんは、どれくらいの世帯を担当して
おられるのか。

大津委員 だいたい350世帯を目安に一人配置することになっているが、地域によっては600
世帯に一人というところもある。といってもすべての人を見守るのではなく、その中で
見守りの必要な高齢者がどれくらいいるかということになる。単身世帯や日中独居、
歩行不如意の皆さんが見守りの対象だ。

松本副部長 我々の自治会には民生委員の方は3名いるが、本当に一生懸命やっている。何
かあったときに、民生委員は何をやっているのだという話になるが、頑張っている
のにそういわれると、腹立たしい気がするくらいだ。

事務局 これまでの議論では現状と課題にまつわる話がいろいろと出た。また、定年退職して
家に引きこもりがちな人たちを、好きなことを用意してどうやって外に引っ張り出すか
が課題だということも皆さんの一致した関心事だ。子どもたちはあまりにも忙しすぎて、
手がかりが見つからないというところか。

松本副部長 子どもたちは低学年まではなんとか地域との接触があるが、高学年になるとま
ったくだめ。子どもが集まらないから、神輿もかつげない。

本多委員 イベントには集まらないが、わくわくプラザには1~3年生の子どもたちが20~30
人、多いところでは60人来ている。そういう場にまちづくり協議会の委員だけでなく、
地域の人も手伝いに出てくれるようになった。なにかきっかけがあれば、人は出て来る
ことを実感している。そして定期的に集まれる場所をどうやって見つけられるかが課題
だ。

石橋委員 場所ありきではないかもしれない。公園体操などは少しずつ参加する人が増えている。人と仕掛けがあれば、場所はあとからついてくるかもしれない。

大津委員 雪が降るのはコミュニケーションのいいきっかけになる。子どもに「気をつけて歩けよ」と声かければ、良い返事が返ってくるし、大人も声をかけ合って歩いている。

松本副部長 人は心の底ではそうした気軽に声をかけ合う関係を望んでいるのだと思う。それができないとつき合いができない大学生になるし、それが昂じると高齢になって鬱になってしまう。

国保委員 会合で若い人に「人の足を踏んだ場合に、どうするか」と聞いても、すぐ答えがでてこない。数人聞くとようやく7番目くらいに「踏まれた人は痛いだろうから、すみませんとあやまる」という答えが出てくる。体感的なコミュニケーションの感覚ができていない。そうしたことも、まず、人とふれあって、挨拶することから体感ができていく。子どものときからのふれあいが大事だ。

松本部長 若い人も会社に入って挨拶が大事だと訓練されればするようになる。注意されたことがないだけで、注意すれば意外に素直に聞いてくれる感じがする。一回だけのふれあいではなかなか注意したりできない。水辺の学校などでは何回も集まって活動しているので、危ないときに、「なにやってるんだ、気をつけろ」と、どなっても大丈夫な関係ができる。

辻野部長 挨拶などの声かけ運動が、やはり大事だということだ。

事務局 これまでのお話では、楽しいことがきっかけで地域に出かけるようになり、地域の環境問題に取り組むNPO活動までするようになった事例があった。楽しいことをやっているうちに地域の問題解決の組織が生まれた事例だと思う。また、大学生になっても人との付き合いの仕方がわからない大学生が登場したということは、子ども時代からの継続的な地域とのふれあいが途絶えてしまうことがその原因かもしれない。そうなるとコミュニティづくりの目的は、地域の問題を解決したり、人とのコミュニケーション能力を養ったりという社会の発展につながるということ、皆さんのお話で確認することができるのではないかな。またターゲットが家に引きこもりがちな定年退職者だと認識することによって、何をしたらよいかの仕掛けが探りやすくなったのではないかな。

本多委員 フローシートに載っている「人とのつながりを深める方策づくり」は、目的とは違う気がする。

辻野部長 コミュニティ部会論点のまとめのテーマに挙げられている「顔の見える地域に根ざした「絆」を構築する」という語句をとりあえず、目的として入れておくのはどうか。また、コンサルタントには今日の発言をフローシートの現状と課題の欄に整理してほしい。次回はそのシートをもとに課題を明確にすることができれば、次の議論の道筋が見えてくるだろう。

3 今後の会議スケジュール

今後の会議スケジュールを検討した結果次のように決定した。議論の内容は現状と課題を確認し、課題解決に向けた方向性について探る。

第3回コミュニティ部会	平成25年3月11日(月) 18:00～	区役所10階会議室
-------------	----------------------	-----------

なお、第3回までの期間に次のとおり全体会が開催される。

第3回全体会	平成25年2月12日(火) 18:00～	区役所6階会議室
--------	----------------------	----------

以上